

櫛

池松 孝子

我が家には、紅葉の季節になると取り出す掛け軸がある。青木繁の「我が国は 筑紫野国や白日別 母います国 櫛多き国」という歌だ。あの「海の幸」などの代表作で知られる福岡県久留米市出身の夭折の画家である。青木繁は絵画のほかにも短歌をよくし、二十八年の短い生涯に多くの文章も残している。この「白日別」は「古事記」にも「筑紫」の意で出てくる。異郷の地から病に伏す母を思う歌だ。

櫛は初夏の頃、緑色の実をつけ、熟すと褐色になりその中に脂肪が充満してくる。カラスやキツキなどが高カロリーと知ってか好むという。おかげで種子があちこちに蒔かれる。江戸時代琉球王国から持ち込まれ、その果実から木蠟を採取するため、十八世紀後半から各地で栽培されて、幕末には経済的にも各藩を潤したらしい。

久留米市東部にある柳坂曾根の櫛並木の紅葉は見事であった。新日本街路樹百選にも選ばれている。南北に一キロ以上、二百本を超える櫛並木が田んぼのあぜ道に沿って続いていた。久留米藩が燈明用の蠟の原料として植樹したものだと言った。大きいものでは幹回りが二メートル以上もある。櫛並木の紅葉は最近、有名になり見学者も多くなつたらしい。細い道に売店まで出ているという。

果実を蒸して压榨し、採れた脂肪は和ろうそく、座薬や軟膏の基材、ポマード、石鹸、クレヨン、化粧品原料として利用価値も高かった。しかし、ご多分に漏れず、合成ワックスの登場で生産量も低下の一方だった。ものの流れにうねりはつきもので、近年合成ワックスにはない粘りが見直され再び需要が増えているらしい。

紅葉した葉がすっかり落ちると、青空をバックにそれまで葉の間に見え隠れしていた白い実が全容を現す。これもまたすばらしい。晩秋の景色の中、遠来のカメラマンがそぞろ歩く。白い実が地上にぱらぱらと落ち、そこに紅葉が重なっている。霜が降りる頃になっても白い実はいじつと耐えるのだ。

白き実の空に映えたる寒さかな

かずえ